みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.4

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

みなとを彩る建築

今年8月に「神戸市都市景観形成基本計画」が40年ぶりに改訂されました。新たに「都心ウォーターフロントの景観形成方針」が示され、港の景観が神戸らしさを象徴する大きな要素として位置付けられました。今回は、神戸の代表的な景観である、メリケンパーク周辺のウォーターフロントを「さんぽ」しました。

元町駅から、繁華街を10分も歩けば海岸通に出ます。大正時代に現在の水上警察署付近が埋め立てられるまで、その名の通り海に面した通りでした。その後も至る所で埋め立てが進み、それまで身近にあった海が着々と遠くなりましたが、今でもこの辺りが市街地と海が最も近接している所です。

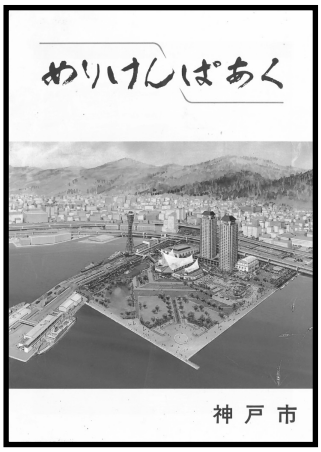
西へ進むと、**神戸ポートタワー**（1963年）：が見えてきます。名古屋テレビ塔（1954年）や東京タワー（1954年）の様な電波塔としての役割を持たない、観光用のタワーとして建てられました。円筒を捻る様に鋼管を組んだ優美な鼓型のフォルムになっています。それは、狭い突堤に建てた高さ108mのタワーの最上部に、出来るだけ広い展望フロア設ける為の合理的なデザインでもあります。ちなみに、京都タワー（1964年）は高さ規制の関係から電波塔として建てられました。原案では京都らしく頂部は相輪に似せたデザインでしたが、電波塔とした手前、アンテナが設置出来る様、単純な四角柱となりました。
神戸ポートタワーは「鉄塔の美女」と呼ばれる事がありますが、色々なタワーと見比べても、赤くて小ぶりなその姿にとても愛着を感じます。王冠のような「PORT OF KOBE」の文字や、その上に掲げられる旗が何とも愛らしく「鉄塔のお姫様」という感じです。

すぐ隣は、**神戸海洋博物館**（1987年）：船の帆と大海原の波をイメージしたという、目立つ鉄骨フレームは屋根の役割をしているわけでなく、その下の建物に乗る飾りです。船の帆や海に向かって開かれた印象などは、シドニーのオペラハウス（1973年）とアイデアの源泉が近いのではないでしょうか。細い鋼管でフレームを構成したところや、それを対比的に白色としたところなど、神戸ポートタワーとの調和に配慮した事がうかがわれます。次に、神戸ポートタワーを超える高さ135mの、**ホテルオークラ神戸**（1989年）：当初はツインタワーとする計画が、バブル経済崩壊のあおりを受け、1棟のみとなったそうす。
現状の低層部からも、もう1棟建てる計画があった事の名残が見られます。関空の対岸りんくうタウンに建つ、りんくうゲートタワービル（1996年）も原設計時は、名前の通りゲートを模したツインタワーでしたが、既に着工時には1棟のみの計画に変更されていたそうです。関西の玄関に建つランドマークとして、モチーフにした一対の門柱のうち片方だけをそのまま建てず、デザインし直す余裕は無かったのでしょうか。一方、ホテルオークラ神戸は、ツインタワーでないとだめというデザインにはなっていないので、神戸ポートタワーに迫る様にもう1棟建てるより、今のままで結果的には良かったと思います。客室なりに設けられたバルコニーや上階ラウンジ部分のシンプルなガラス壁面、必要に応じて作られた様の塔屋部分など、おとなしく上品に見えます。

（1）

（2）

（3）



（4）

（1）神戸ポートタワー、神戸海洋博物館、ホテルオークラ神戸が建ち並ぶ代表的な神戸の景観
（2）メリケンパークオリエンタルホテルに横付けする大型帆船
（3）海に面した「BE KOBE」のモニュメント
（4）1987年メリケンパーク計画時の神戸市港湾局発行パンフレット　※（1）（2）（3）2021年9月筆者撮影

そして、海に突き出して建つのが、**メリケンパークオリエンタルホテル**（1995年）：中突堤の先端いっぱいに建てられ、停泊する船と直接出入りができる構造になっています。外観は波を象ったデザインで、連続するバルコニーは客船のイメージです。芦屋浜に建つ、芦屋ベイコート倶楽部（2018年）は豪華客船の姿そのものです。神戸ポートピアホテル本館（1981年）も船をイメージしたとされ、このように海辺に建つホテルの多くに、船をイメージしたものがあります。有名なところでは、横浜みなとみらいのヨコハマインターナショナルコンチネンタルホテル（1991年）や、ドバイのブルジュ・アル・アラブ（1999年）もそうです。しかし、実際の大型船がホテルに横付けしている景観が見られるのはここだけです。

最後に、**メリケンパーク**（1987年）：にも触れておきたいと思います。メリケン波止場と中突堤の間が埋め立てられ、メリケンパークとなりました。神戸港開港以来、メリケン波止場は港の中心で、外国航路の発着地でした。美しい西洋建築が建ち並ぶ海岸通りに面した波止場は、今でも上海、外灘で見られる様なエキゾチックな眺めだった事でしょう。昭和の時代には、はしけ溜りとなり、それもまた今では見られない港の風情でした。メリケンパークは、見渡すと全体の様子が大体わかります。多くの人が、広場越し遠くに見える海と、広々とした雰囲気だけを体感して帰って行った事でしょう。ところが、広場の一番先、海に面する場所に「BE　KOBE」と単に文字を象ったモニュメント（2017年）が出来てからは、それを目指して人々が行き交う様子が見られます。モニュメントの設置は、震災から20年、開港150周年の行政主導の記念事業です。発想も費用対効果も秀逸だと思います。このモニュメント一つで、それまでただ広いと感じさせられていたメリケンパークが、空間としてまとまった気がします。デザインや設置場所、そしてスケール感もちょうど良いと思いますが、何よりKOBEの持つブランド力を再認識しました。

前述の「神戸市都市景観形成基本計画」では、海上からの町の見え方についても示されています。海に開き、海から人を迎え入れてきた神戸の生い立ちを大切にする考え方だと思います。改めて、港町としての魅力づくりに想いが膨らみます。

（　）内は、開業年

久保田 淳司（くぼた じゅんじ）
ディーオーケープランニング
神戸ＬＡＢ代表
／一級建築士
／インテリアコーディネーター